<評書>

『廣池博士記念文庫漢籍分類目録』

鈴　木　隆　一

本書は広池千九郎博士が多年にわたって集収された和漢洋の図書のうち、最初に完成された漢籍についての分類目録である。この記念文庫に収めた図書の外に、漢籍の一部分は天理図書館に博士自ら寄贈されているので、両蔵書を合せ見ることによって集書の全貌が明かになるわけである。そのため本書には、簡単なリストではあるが、天理図書館所蔵本をも収録しているのは行き届いた配慮である。天理本のリストは３部あり、１は寄贈申込用、２は図書館受入用、３は整理済入庫用のものである。正確な数字ではないが、経部に属するものだけを数えると第１リストは67点、第２リストは63点、第３リストは47点となっている。第１・第２リストと第３リストでこの異同があるから、四部全体では相当の数量になるのではないかと考える。これは単冊記入を部数記入に改めたなどの整理上からの異同であるかも知れないが、調査する必要があるように思われる。

個人の集書には二つの型があり、一つは愛書家のそれで、貴重本・珍本などの現在入手の困難な図書を集めることを目的とする。他は或る主題に重点をおいて集めるものであり、学者の集書がこれにあたる。本書は後者に属するものであるが、この集書は主題以外に四部の全般にわたっていることが一つの特色である。博士の学問領域の広さを示すものと思う。個別の構成を点数から見て、経部においては春秋・四書・小学類が多く、また天理本にもこ

の関係の図書が含まれている。博士には『支那文典』および『日本文法てにをはの研究』の二つの文法書の著述があり、とくに前者は我が国における最初の系統的の文法書であるといわれている。小学類はこの書の著述に参考されたのではないかと想像する。史部の中の政書類は、天理本と合せれば基本文献は殆んど揃っており、これも博士が中国法制史の創始者であったことを思えば当然のことであろう。子部においては医家・芸術類に属する図書が割合に豊富であるが、これらはどのように利用されたかについては分らない。雑家・類書類は参考図書として便利なものであるから、研究に利用されたものと思う。集部については別集・総集にわたって、各時代の代表的の詩文集を殆んど網羅しているように思われる。私は文学の門外漢であって、個別の版本を批評する力はないが、これだけの種類を独力で集められるには並々ならぬ努力を要したことであろう。この熱意についての理由を次の如く臆測する。天理本の中には詩文集は殆んど含まれておらず、そして天理図書館への寄贈は大正２年と記されているから、集部はこの時期以後からの集収と考える。これは博士が道徳科学の本格的の研究に着手された時期であることを思うと、そのための資料ではあるまいか。科学と詩文集とは如何なる関係にあるかと云えば、中国の文人は文学者であるとともに優れた儒学者でもある。否、儒学者であって然る後に優れた文学者になったといった方が適当であろう。それ故その作品には儒教の道徳・政治思想を教養とし、人生や自然の真理を洞見したものが多い。詩文集に対しての博士の関心は、文学作品として鑑賞するよりは、この実践道徳の記録に興味を持たれたのでないかと推測する。最後にこの蔵書は50点に近い明刊本と清刊本の多数を含む集書であるが、それにもまして大きな特色は、四部にわたって和刻本が非常に多いということである。博士の集書の方針が和刻本を主とし、その足らないところを中国刊本によって補ったのではいかとすら感ずる。これは貴重な集書である。私は嘗って徳島県立光慶図書館に蔵する阿波国文庫を拝見したことがある。この文庫は江戸後期の蔵書家屋代弘賢の不忍文庫と、寛政の三博士の１人、柴野栗山の蔵書を収めたものである。その図書は中国刊本の他に和刻本

と写本類が豊富であったことを記憶している。本書著録の和刻本はその点数において、はるかに彼に較べて勝っているように思う。この和刻本を通覧してその飜刻の多種多様に驚くとともに、江戸期の出版活動が想像以上に盛んであったことを知ることができた。現在、我が国の出版物の半数近くが外国書の飜訳であるといわれているが、江戸期のそれは現代に劣らず中国文化の吸収に熱心であったことを示すものである。この出版事情も明治期に入ると急速に衰退した。それだけでなく、各地の図書館もこの文化遺産の集収に対して、特別の注意を払ったもののあることを寡聞にして知らない。和刻本の中には、既に原刊本を見ることのできないものもあり、学術の研究には必要な資料に属する。さらに江戸期における学術の傾向や、出版の事情を知るためには現物について調査することが必須の条件となる。この和刻本も現在では、まとめて集めることが殆んど不可能であることを思うと、博士の集書は先見の明があったというべきであろう。

本書は本編の他に、天理図書館所蔵の広池文庫目録と書名索引・人名索引・検字表を付録としている。目録書としては詳細にして且つ正確に記述されていて、注意すべき事柄もない程によく出来ている。編纂者の苦心に対して敬意を表したい。強いて私の感じた数点を上げて批評に代えたい。その一つは書名についてである。書名に「分類目録」と冠しているが、現在の図書館学では全集・合集・双書などに含まれている細目をも分出分類したものを分類目録と称しているようであり、一部一分類の目録は蔵書目録と称するのが普通である。本書はこの蔵書目録に属するように思うが如何でしょうか。次に分類については、意見もないわけではないが、採用の分類表が図書館によって異なっているので、意見を述べることを差し控える。仮りに分類の不一致があっても付録の索引を利用すれば、使用上の不便はなくなるであろう。記述については、詳細であって一見して一書の書誌をことごとく知ることができる特長をもっている。反面、利用者にとってやや冗長の感じがする。冊子目録の記載は簡潔に重点をおき、記述は必要事項を最小に止め、委細は図書館用の目録に譲った方がよいのではないかと思う（実際問題として、これ

は編纂にあたって二重の手数を要することになるので、或は無理な注文であるかも知れない)。簡潔ということから私見を述べれば、先ず本書の記述に括弧の使用の多いことが目につく。これは編者の補った文字を、本文の記載から区別するためのものであろうが、標題紙の一定しない古書にあっては、正当な理由に基づくならば稀覯書を除いて、補字はあまり重視しなくともよい。我が国および中国の既刊の目録書はその見本である。こう考えると、著者名についての括弧の大半は省略できる。また標目とした書名の出所は、凡例において採録の順位を示しておけば、見返・版心などの表示は不用になると思う。版次および版種についての記載例は、先ず本記入に刊年を上げ、次に括弧をもって依拠の原本と版種を閉ぢている。原本のないときは単に影印・石印・活版・木活・再刻などの文字を括弧に入れているが、これらの文字を本文の刊年と併記し、例えば民国〇〇年石印本、文政〇〇年再刻本とすれば括弧の殆んどが不用になる。依拠の原本名とその刊年は、注記として記入の最後に廻したらどうであろうか。この他、補写・補修・零本・題簽・書入などの文字も注記にまとめたならば括弧は一カ所に集まり、見易い体裁となる。次は出版地について、本書はこれを省略し、ときどき地名を括弧をもって閉ぢているが、出版地は省略すべきものでない。恐らくこれは標題紙の記載の有無に従ったものであろうが、記載がなくとも補うべきである。中国の地名についてはしばらく措くとしても、我が国の出版地は江戸・京・大阪の三都に集中しているので、調べれば容易に明かにすることができよう。最後に本書の記載例の中から少し気付いた点に触れてみたい。その一つは独自の書名をもたない注釈本、すなわち巻頭において正文名を上げ、著作表示は撰と云わずに注と称しているものの扱い方である。漢唐の著述については記載の通りに記入するが、宋以後では同種の著述が多いので、巻頭以外に書名を求めて同種本から区別するのが従来の記入法であった。本書は小学類の段注説文解字について巻頭名をとっているが、従来の目録書は目次書名の「説文解字注」をとり、或は敷衍して「説文解字段氏注」と称し、従って著作表示は注を撰に変えている。これは一見して他書と区別することができる便があ

るからである。本書の四書類にもこの区別法が適用できると思う。次は排列の順序について、雑史類の最初にならべた「国語章解補正」は民国人の著述であるから下位におくべきであろう。類書類においても宋元の著述と清代のそれとの順位が違うように思う。別集の蘇東坡の著述の中へ「曾文定公文抄」を割り込まさぬ方がよい。排列に順位をつけるとき、時代を異にしたものは容易に区別することができるが、同時代のものの区別は簡単でない。著者の生卒年の明かでないものが往々あるからである。本書の分類は一部を単位としたものであるから、同一分類に属する図書も比較的少ないが、若しも双書類を分出したならば、同一分類に集中するものが多く生ずる筈である。その場合に排列が不同であると検索に支障をきたすことになるので、排列はできるだけ正確にする必要がある。以上、数点について所見を述べたのであるが、多くは従来の漢籍記入法からの私見である。本書の編者は、従来の目録にあきたらず、より正確を期しての精密記入となったものかも知れない。そのことは私にはわからないが、ただ目録は見易いということも重要な要素であることは事実である。いずれにしても私の取り上げた問題は些細な事柄であって、本書の価値を損ずるものでないことはいうを待たない。